

宗教とジェンダーの最前線Ⅲ

共催までの経緯



川橋 範子・小林 奈央子

KAWAHASHI Noriko & KOBAYASHI Naoko

本研究会は、2018年・2019年と南山宗教文化研究所（以下、NIRC）で開催してきたワークショップ「宗教とジェンダーの最前線Ⅰ・Ⅱ」に続く第3回目の企画として、2021年3月2日、龍谷大学ジェンダーと宗教研究センター（以下、GRRC）との共催で行われた。今回共催となった背景には、本報告者である川橋・小林の2人が2020年4月より、ともにGRRCの研究員に任ぜられたことがある。

はじめにNIRCが単独で行ってきた「宗教とジェンダーの最前線」が共催となるに至った経緯を以下、簡単に述べておきたい。

「宗教とジェンダーの最前線Ⅰ」（2018年3月2日）の開催は、前年の2017年にNIRCから *Japanese Journal of Religious Studies* 44-1: *Gendering Religious Practices in Japan* が刊行されたことがきっかけとなっている。このベースにはさらにその1年前に刊行された川橋 範子・小松加代子編著『宗教とジェンダーのポリテクス—フェミニスト人類学のまなざし』（昭和堂、2016）がある。JJRS（44-1）では川橋・小林が編者となり、仏教、キリスト教、山岳信仰、新宗教、スピリチュアリティをジェンダーの視点を通して批判的視座から考察した論文および書評を所収した。日本における宗教とジェンダー研究の近年の成果を英文で発信できたことは大きな意義があったと考えるが、特集号を出版して終わりではなく、その発刊を契機として、宗教とジェンダーに関する研究活動を一層アクティブに、継続的に行っていくことが大事であるとの認識もあった。そのため、NIRCでワークショップを開き、本誌の執筆にかかわった研究者を中心に、直接研究報告をしてもらう機会を設けることにした。それがワークショップ「宗教とジェンダーの最前線」のシリーズの始まりである。

第1回目のワークショップでは、当時NIRCで客員研究員をしていた Heawon Yang 氏による“Can religion and feminism really meet? : Some thoughts on the recent discussions in the US”と、JJRS（44-1）で書評を執筆した村山由美氏による「流行り神から布教者へ—〈宗教〉化と金光教女性布教者」の2つの発表が行

われ、バックラッシュに飲み込まれることなく、ジェンダーの批判的視座を宗教研究の中で主流化させるための多様な戦略の有効性について改めて考える機会を得た。これについては村山由美氏による「私たちにフェミニズムは必要か」(『南山宗教文化研究所 研究所報』第29号、2019年)の特に結論部分を参照されたい。

第2回目のワークショップ、「宗教とジェンダーの最前線Ⅱ」(2019年6月27日)では、JJRS(44-1)で書評論文を執筆した工藤万里江氏による「キリスト論との格闘—フェミニスト神学とキア神学の試みから」と、2017年4月から2年間NIRCの研究者であった横井桃子氏による「国際比較から考える仏教とジェンダー—寺族女性の役割意識」の2つの研究発表が行われた。それぞれ村山由美氏と川又俊則氏がコメントをし、女性にとって縛りや抑圧をもたらすことも多い宗教の中で、どのようにそれらに抵抗しながら、また時にそれらを〈内部〉から壊しながら自分らしく生きられるかなどが議論された。

以上のように、『宗教とジェンダーのポリティクス』の刊行およびJJRS(44-1)の特集号の編集に端を発し、NIRCで2回のワークショップが開催された。また、それらと並行して、川橋のほか横井氏も寄稿している、那須英勝・本多彩・碧海寿広編『現代日本の仏教と女性—文化の越境とジェンダー』(法蔵館、2019)が、龍谷大学アジア仏教文化センターの叢書の1つとして発刊された。さらに、日本宗教学会の『宗教研究』93巻2号(2019)で「ジェンダーとセクシュアリティ」の特集号が生まれ、川橋・小林のほか、JJRS(44-1)の特集号にも執筆した猪瀬優理氏や小松加代子氏ら、さらに『宗教とジェンダーのポリティクス』に執筆した嶺崎寛子氏がそれぞれの研究分野から宗教とジェンダーにかかわる論文を執筆した。1989年の「宗教と女性」の特集号以来、30年を経ての企画であったが、この刊行によって「宗教とジェンダー研究」に再び注目が集まることとなった。

そうしたなか、龍谷大学において「2020年度重点強化型研究推進事業」の募集があり、当大学の岩田真美氏(真宗学)を代表者に「ジェンダーと宗教研究センター」(GRRC)の創設を目指し応募することとなった。それが採用され、2020年4月よりGRRCが発足・始動した。岩田氏がセンター所長となり、センターの研究者として、川橋・小林のほか、小松、猪瀬、村山、嶺崎の諸氏はもちろん、「宗教とジェンダーの最前線Ⅲ」の発表者となった竹下ルツェリ・アンナ氏や前出の『現代日本の仏教と女性』の編者の1人でもある本多彩氏など、近畿地方に研究の拠点をもつ研究者も加わった。

ここまで述べてきたように、「宗教とジェンダーの最前線」がGRRCとの共催になった経緯は、偶然の産物という類のものではない。NIRCでのJJRS(44-1)の発刊やワークショップの開催、さまざまな書籍の刊行など「宗教とジェンダー研究」

に関する研究成果を辛抱強く地道に積み上げてきた結果が、GRRCの創設につながり、さらに今回のようなNIRCとの共催による研究会の開催へとつながったのである。

当日の様子

今回のNIRCとGRRCの共催研究会は、GRRCで展開されている4つのユニットのうち、「ユニット1」（ユニット代表：清水耕介龍谷大学国際学部教授）が担当した。ユニット1はグローバルな視点から宗教とジェンダー研究を推進することを目的としている。

当日の発表者は、上述した京都外国語大学の竹下ルッジェリ・アンナ氏と金光教国際センター次長を務める藤本拓也の2人で、それぞれの発表に対して、NIRCのティム・グラフ氏と多摩大学の小松加代子氏がコメントを寄せた。

まず、竹下ルッジェリ・アンナ氏が「ジェンダーに対する江戸時代の臨済宗の立場をめぐって」と題し、江戸時代における臨済宗とジェンダーについて紹介した。とりわけ日本臨済禅中興である白隠禅師（白隠慧鶴、1686-1769）の作品を分析し、彼の言葉を借りながら江戸時代の女性禅者の特徴を示した。日本の近世は身分制社会であり、基本単位は家父長制的「家」である。その中で女性はこのような「家」を代表できない者として存在し、男性である家父長に従属しながら生きていた。その上で、儒教思想の普及によって、その基底にある男尊女卑思想が社会の柱になり、女性は自己の意志を享受することができなかった。このような社会状況が生み出されたことに対して宗教も責任があり、仏教概念の一部も直接的な原因になった。特に、女性に対する軽視と差別を導き、尼僧や大姉を苦しめた概念は「五障」および「三従」、「変成男子」、「不浄水」であったということが明らかにされた。

また、江戸時代において尼寺院として大きな役割を持っていたのは、14世紀後半から上流階層のつながりを持つ尼門跡寺院いわゆる比丘尼御所である。その中で、白隠禅師が関連していた宝鏡寺や女性のための社会的な役割を果たしていた縁切寺または駆込寺として知られていた東慶寺の存在の重要性が指摘された。この発表内容とコメンテーターのグラフ氏への応答は今回の所報に論文として掲載されているのでそちらをご覧ください。

次に、藤本拓也氏が「金光教におけるジェンダー／セクシュアリティの諸相」と題し、主体化に関する「呼びかけ理論」（アルチュセール、バトラー）を参照し、金光教祖時代に活躍した女性・荻原須喜（おぎはらすぎ）の回心を、宗教的主体化の視座から探った。アルチュセールによると、権力は個人へ呼びかけ、個人はそれに振り向き、イデオロギーへ服従し従属化＝主体化する。バトラーはこ

の過程を、自己への反省的振り向き、罪責意識の形成、倫理的主体の構築と再定義した。藤本氏は両者の思考を、超越的呼びかけへの振り向きとして宗教の領域に適用すれば、須喜の宗教者への転回は超越への服従と把握できであろうと述べた。また、須喜より先に回心した夫が、家を代表して信仰対象を決めるのではなく、家族と相談するよう教祖に促されている事実は、信仰対象を自己決定する須喜自身の宗教的エージェンシーが確保されていたことを示していると述べられた。さらに安丸良夫は、通俗道德の実践により形成された倫理的主体が、超越に直面し自律性が破綻するところに、民衆宗教の発生を見出したが、この理路は、超越に服従した宗教的主体への再編の議論に繋げられると示唆し、同時に安丸の通俗道德論は村落指導者層という男性モデルから析出された理念型であり、そのジェンダー視点の欠如も見逃してはならないということも指摘した。

この発表に対し、コメンテーターの小松氏からは、金光教がLGBT会を認可したことや、女性布教師が多く教会長にも女性がいる点から寛容な宗教であるといった言い方もされることについて、LGBT会を「認可した」とか、「寛容だ」という言葉に疑義が呈された。つまり、もしも神の氏子として相互承認をするということであるならば、認可という上から下への通達という言葉の妥当性を再考すべきという意味である。さらに、認可した教団はここが初めてという言葉が、我々は他の宗教とは違う、という宣伝になってしまう危険性も指摘された。このことと関連して小松氏は、全日本仏教会主催シンポジウム「仏教とSDGsⅡ～LGBTQの視点から考える～」に対する講評を書かれたゲイ・アクティビストで文化人類学者の砂川秀樹氏の論考（『仏教タイムス』2021年1月14日号掲載）を紹介した。砂川氏は、LGBTとジェンダーの問題は地続であるがゆえに、LGBTについてとりあげることで、ジェンダーに関する課題もクリアされているかのような過剰なメッセージを与えてしまう危険性を指摘したからである。続いて小松氏は、神からの呼びかけによる回心によって、通俗道德的な価値観に基づく生き方からの転換が起こりえる、あるいはジェンダー秩序を超越する可能性が見られるという藤本氏の指摘を評価しつつも、いくつかの問題提起をした。まず、性差別は、金光教独自の価値観から生まれたというより、布教活動において世俗の価値観への迎合の中から生まれた、という論旨に対して、人間としての教祖は時代の影響から自由ではなく、下支えの働きを女性に求めてきたことが教団運営に関わる役割から女性を遠ざけてきてしまったのではないかと問いかけた。また、金光大神がさまざまな関係性の中で葛藤や妥協など人間的な努力を行い、それらが死後に教祖の活動として解釈されるとき、神の名の下の規範からこぼれ落ちる人びとも出てくる可能性は否定できず、教祖の言葉の解釈は、ジェンダー規範とのかかわりにおいて慎重に見直されるべき重要な問題として存在していると述べ

た。第二に、呼びかけと主体化の理論について、神からの呼びかけが権力や共同体の縛りと絡まっていないかどうかをどのように見極められるのか、という点を見過ごすことはできないとした。もともとアルチュセールの「呼びかけ」は「尋問」という意味だったことを考慮すると、悪い者の自覚の強制や、超越と思われるものへのお任せが依存や服従になる危険性も考えなくてはいけない。教団を支える下支えの仕事こそ私が選び取った仕事であるという女性たちを称賛する傾向があるが、その信仰共同体の中のジェンダー規範を付度した結果であることと、呼びかけへの振り向きが権力への付度になること、との違いを明確にすることはできるのか、という点も見なくてはいけないことが強調された。

最後に川橋が簡単な総括コメントを述べた。初めに、NIRCは宗教間対話の拠点であり2004年にはフェミニスト宗教学の先達のウルスラ・キング氏を招いて講演会「Gender and Interreligious Dialogue」が開かれた場であることを紹介した。キング氏は宗教間対話にフェミニズムの視点が欠けていることを一貫して批判してきた人であり、この意味でも宗教文化研究所がこの3年、ジェンダーと宗教研究のワークショップをホストしてきたことの意義は大きいと指摘した。続けて、社会一般の「リブ運動」から50年が経過し、宗教界では同様の運動が80年代中ごろに始まってから40年弱になるが、メディアや学会で大きなニュースになったいわゆる森発言などは宗教教団にいる人々にとって既視感がありすぎる、と述べた。仏教教団における女性対象の研修会の冒頭あいさつで、役職にある男性僧侶から「分をわきまえることが必要である」という旨の発言を聞いた記憶は何度もあるからである。小松氏のコメント冒頭でも、森喜朗元オリンピック組織委員会会長の「わきまえている女性」発言について、既存の価値観で既得権を確保している人たちが、規範に従わない人をはじき出す行動であり、うるさい女性たちが難癖をつけていると問題を矮小化するミソジニーの感覚は、日本の文化に根深いことが批判された。現在、社会の多くの局面で、男性中心主義に挑戦する女性を罰して従順な女性をもちあげるミソジニーとジェンダー平等へのバックラッシュが台頭してきている。これに関連して、筆者たちは、宗教研究においてフェミニズムに対する曲解されたイメージが流布されていることを危惧している。一例として、国際宗教研究所の第15回国際宗教研究所賞・奨励賞についての受賞理由講評中では、女性宗教者の主体について、家父長制や不平等な権力構造といった硬直的なフェミニズム的視点から論じていない点を高く評価するという書かれ方がされており、権力構造の問題を指摘することに対して「硬直的なフェミニズム」という言葉が用いられている（この講評については小松と川橋が国際宗教研究所に疑義を呈したのち、簡単な訂正文が理事長名で掲載されたので以下を参照されたい。

URL: <http://www.iisr.jp/award/2019/folder/index.html>

「わかまえている女性」のジェンダー研究者は容認するが、「わかまえていない女性」のジェンダー研究者は廃除する傾向があるとすれば問題である。今までのホモジナス（同質的）でホモソーシャルな共同体に異なる意見の人々が参入するのを恐れることはわかるが、宗教学の重鎮と諸宗教の教団代表者で構成される国際宗教研究所の女性委員の比率の低さは目にあまる。日本宗教学会でも、川橋、小林、猪瀬をはじめとして宗教とジェンダー研究に携わるメンバーが委員をつとめる男女共同参画・若手支援WGが立ち上がり、学会のジェンダー公正に向けた取り組みが始まっているが、その活動を通して、ジェンダー平等に関する宗教学の後進性や遅延は、その背後の宗教教団の家父長制構造に起因しているということが一つの課題として見えてきている。言い換えれば、宗教教団と研究者の共犯関係ということもできる。

今後の展望

まとめとして、宗教とジェンダー研究は、女性研究者と女性宗教者（および、ジェンダー問題に自覚的な男性研究者と宗教者）のネットワークなしにはもはや考えられない、グループエフォートになっている。しかしながら、今はスポラディック（散発的）なジェンダー平等の運動が宗教界に点在している状況である。ごく最近の仏教教団にも多様な動きが見られる。GRRCのワークショップでも発表した藤場芳子氏がかかわる「真宗大谷派における女性差別を考えるおんなたちの会」が性差別に関する教学委員会立ち上げの要望を教団に出したこと、川橋も関係者である曹洞宗でジェンダーを視野に入れた水平的なSDGsの推進委員会が立ち上げられたこと、全日本仏教会の各種委員会が女性委員の比率を一定の水準まで向上させていることなどがあげられるが、これら組織的に連続していない動きをどうつなげて一つの潮流にしていけるか、GRRCの存在意義は大きい。また、これまで、ジェンダー研究と宗教研究には不和やお互いへの無関心があると言われてきたが、この二つの学問的分野の分断を横断する動きも見られるようになってきた。来年度中に丸善から刊行予定の『ジェンダー事典』には「宗教・信仰」のセクションが設けられ、おおよそ20の項目が収録されることになる（小松と川橋がこのセクションの編集委員を務める）。このような変化は、フェミニズムやジェンダー研究が宗教への無関心を再考した一つの証拠として歓迎すべきことである。聖職者の性的暴力が問題にされることが多いが、このような事象を防ぐためにも、最近注目されるチャプレン養成などに、ジェンダー研修が必須であることは言うまでもないであろう。宗教系のメディアにも「ジェンダーはうるさいから記事にしたくない」という偏見を持つ編集者がいるという話を聞いたことがあ

る。この度のワークショップを『仏教タイムス』の女性ジャーナリストが優れた記事にしている(仏教タイムス 3月18日号)が、今後は宗教系メディアの中にも、ジェンダーの視点を持つ女性記者が増えることが大切である。今後も宗教の中のジェンダーの多様性と共通性を見ていくワークショップを重ねていき、アカデミアと実践の場双方で、さらに多くの人々の共感を得る動きにつなげていきたいと願う。

かわはし・のりこ
国際日本文化研究センター

こばやし・なおこ
愛知学院大学